

平成 21 年 6 月 30 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2006年度～2008年度

課題番号：18730452

研究課題名 (和文) 認知症患者と介護家族への心理教育的介入プログラムの開発

研究課題名 (英文) A development of psycho-educational program for dementia patients and family caregivers

研究代表者

森本 美奈子 (MORIMOTO MINAKO)

梅花女子大学・現代人間学部・講師

研究者番号：70388601

研究成果の概要：認知症患者と主家族介護者を対象とした心理教育的介入プログラムとして、回想コラージュ療法を用いたプログラムを開発した。配偶者介護ではとくに、公的サービス利用に至るまでの期間における介入の必要性と、緊急時における道具的・情動的サポートの必要性が示唆された。また介入指標として、患者ではバウム・テストにおける成熟度、および人格特性における開放性に、新たな可能性が見出された。さらに介護者では介護エフィカシーおよびレジリエンスの向上が示され、本介入プログラムの効果が実証された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,900,000	0	1,900,000
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	210,000	3,910,000

研究分野：人文社会系・社会科学分野

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学 (3903)

キーワード：(1) 認知症患者 (2) 配偶介護者 (3) 心理教育 (4) 回想コラージュ療法 (5) グループ介入 (6) 介入指標

1. 研究開始当初の背景

認知症患者の増加にともない、ケアの質の向上は急務である。患者へのケアには、他の要介護高齢者とは質量ともに異なった介護が必要であり、また決定的な薬物療法がない現状から、患者の Quality of Life (QOL) 向上を目指した、介護家族への様々な心理社会的介入が試みられつつある。その一つとして、心理教育が注目されてきているが、わが国では心理教育プログラムに関する具体的な検討や、実証的研究の積み重ねが少ない。

そこで本研究では、プログラム内容に関する洗練化を目指して、認知症患者家族への調査および介入を行い、その効果を実証的に検討することを目的とする。また、効果検討に際した適切な介入指標の開発もあわせて検討する。

2. 研究の目的

- (1) 認知症介護家族が求める心理社会的サポートニーズを把握すること。
- (2) 危機介入が必要な患者、家族のスクリー

ーニングに役立つアセスメントを作成すること。

(3) 家族への心理教育の効果には、介入形態や内容による違いがあるのかを検討すること。

3. 研究の方法

(1) 認知症患者家族 46 名（配偶者 26 名、子および子の配偶者 20 名）を対象に、個別面接調査および集団による家族会、患者会においてインタビュー調査を行った。

(2) 一般成人 178 名を対象に、アセスメントの一つとしてレジリエンス（精神的回復力）に着目し、尺度作成を行った。

(3) 認知症患者と配偶介護者合計 14 名に対して、回想カラーリウセラピーを用いた心理教育プログラムを実施し、介入効果の検証を行った。

4. 研究成果

(1) 認知症患者家族へのインタビュー調査の結果、全体の家族のニーズとして①日常時の支援、②緊急時の支援の 2 種類に大別された。

まず日常時の支援としては、続柄および各個人のもっているソーシャルネットワークによってサポートニーズは異なることが分かった。具体的には、子どものいない、あるいはいても遠方であるか介護に対して非協力的であるといった老夫婦世帯に対しては、配偶者の施設入居による孤独感やサービス利用自体に対する抵抗感を感じやすいため、サービス利用をすすめるにあたっては慎重な対応が求められるだろう。一方、子どもなどの協力を得やすい老夫婦の場合積極的なサービス利用に対する抵抗感が少ない場合が多いこと、さらに、家族のもっているコーピングスキルの違いも考慮する必要があることが示唆された。

緊急時の支援としては、患者の問題行動の中でも特に暴力や攻撃性を伴う行動が発生した場合、精神科救急や精神科医の往診が可能な病院といった道具的サポート源と、それらについての情報的サポート源が求められていることが示唆された。さらに、これらニーズへの影響要因として、ケアマネージャーなど、公的支援スタッフとの関係性やスタッフのもつ情報量、また利用施設のケアの質もこれら支援への影響要因として大きな要因であることが窺えた。

また患者へのアプローチとして、認知機能の低下による影響を受けない、すなわち言葉によらないアプローチの必要性が示された。

介入プログラムを新たに作成するうえで、

これらの研究結果を取り入れ、心理教育介入プログラムへの礎とすることを目指した。

(2) 認知症患者および主家族介護者を対象に、個別介入およびグループ介入を行った。両群間の効果査定に関する差異を以下のアセスメントにもとづき、行うこととした。

①認知機能②日常生活動作能力③Dementia Happy Check④関係性指標によって検討した結果、本調査では両群で有意な差はみられなかった。このことから、患者家族同士の感情共有による効果が顕著になっていない可能性が考えられた。対象者の背景などの特性によって、両介入方法のいずれが適当であるかを考慮したうえで、介入されなければならないことの重要性が示されたといえよう。またグループ介入における効果を、どのように増大させていくかについて、今後考慮せねばならない要因が示された。また、更なるアセスメント検討の必要性が示唆された。

すなわち対象者の患者からみた続柄によって、介護負担の種類や患者との関係性の質が異なるため、介護生活上のストレス評価の種類も異なる可能性が示唆された。現在のグループ介入においては、対象者の背景について特に統一されていないが、たとえば親を介護している者と配偶者を介護している者では、共有できない部分も多く、集団の凝集性が増大しにくい一因になっているのではないだろうか。一方で、男女でも差異は存在するが、男性にとって女性からの評価を受ける場面も多く、また男性同士における感情共有のためのコミュニケーションスキルが女性に比して得意ではないことから、性別については、むしろ混在することによる意義があるのではないかと考えられる。

アセスメントに関しては精神健康の指標を取り入れたが、介入方法による効果の違いを明らかにすることはできなかった。介入方法の差異がなかったことによるものか、アセスメントの問題によるものかは本調査のみでは明らかではない。心理教育介入に関しては、これまで具体的な介入方法による違いはあまり検討されてきていないのが現状である。

今後は、家族だけでなく患者もふくめ、グループ介入を効率的に継続していくために、様々な観点から分析検討を重ねる必要があると思われる。

(3) 先にも述べたように、介入効果の検証に際しては適切なアセスメントを行う必要があるが、介護者側の指標の一つとして、介護上のレジリエンスに着目することとした。そのため、一般成人を対象に成人用レジリエンス尺度作成を試みた結果、4 因子が見出され「

危機検討力」、「挑戦力」、「感情調整力」、「適当力」と命名した。また基準関連妥当性として、レジリエンスとGHQの関連を検討した結果適度な負の相関が示され、GHQ High risk群ではLow risk群に比して、有意にレジリエンス得点が低かった。本尺度は十分な信頼性を有しており、先行研究における構成概念を反映していたことから、妥当性も示されたといえよう。

属性差に関して、「挑戦力」と「適当力」に性差がみられた。女性が男性よりも高いレジリエンス傾向を示すという先行結果の一部が支持された。一方で「適当力」に関して若年では男性が女性より高かったが、熟年では性差が認められなかった。配偶者の有無など他の属性結果を考慮すれば、女性では結婚などの大きなライフイベントが「適当力」を高めている可能性が考えられる。また「挑戦力」と「感情統制力」における年齢差について、レジリエンス全体としての差異はみられないものの、年齢と共にレジリエンス要素に占める重要性が「挑戦力」から「感情統制力」に移行していく可能性が示された。また「危機検討力」についても経験の影響が大きく、レジリエンスは全体に常に変容しうる特性として、介入指標としての適切性が示された。

Table 1 レジリエンス尺度の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転後)と平均値・標準偏差

項目	I	II	III	IV	共通性
I 危機検討力 (M=3.10, SD=.98, $\alpha=.85$)					
私は様々な角度から状況をみる事ができる	.73	.03	-.30	.04	.44
自分が何を考え、それがどんな風に自分の気持ちに影響するのか、よく理解している	.73	.08	-.13	-.09	.41
困難な状況にある時でも、たいていその打開策を見つけることができる	.72	.04	-.04	.06	.39
たいていの場合、問題の本当の原因を突き止めることができる	.70	-.13	.05	.05	.39
問題が生じると、解決策を試みる前にまず、何が原因かじっくり考える	.63	.08	-.09	-.12	.26
私は自分なりの規律をもっている	.60	.03	.01	-.04	.34
たとえ本気でなくても、困難な状況は自分でコントロールできると信じるほうが良い	.46	-.01	-.08	-.13	.47
私は以前にも困難を経験してきているので、大変なことがあっても乗り切ることができると思う	.43	.28	.07	.07	.37
II 挑戦力 (M=3.19, SD=1.06, $\alpha=.82$)					
自分には将来の目標がある	-.10	.86	-.09	-.01	.39
自分の将来に希望をもっている	-.10	.81	-.01	-.13	.53
自分の目標のために努力している	-.01	.69	.16	-.11	.54
いっしょうけんめいやれば、必ず報われる	.10	.52	-.07	.06	.62
チャレンジとは自分を奮めたり、何かを学んだりすることだ	.13	.44	.02	-.06	.26
新しいことにチャレンジするの好きだ	.24	.44	.03	.01	.35
III 感情統制力(逆転) (M=3.39, SD=1.04, $\alpha=.65$)					
感情に流されやすい	-.30	.03	.64	.05	.56
その日の気分によって行動が左右されやすい	-.10	.00	.62	-.06	.40
ものがたがうまいかなと、すぐにあきらめたくなる	.15	.03	.57	-.16	.63
仕事でも家庭でもうだが、自分の問題解決能力に不安がある	.20	-.08	.48	.20	.34
IV 適当力 (M=2.57, SD=1.05, $\alpha=.58$)					
自分の手に負えないことについて、時間をかけて考えない	-.11	.03	-.22	.73	.56
私はよくよく悩むことはめったにない	.15	-.02	.16	.48	.50
集中の妨げになるようなものを考えないようにできる	.16	.06	.18	.35	.36
寄与率(%)	25.96	6.74	5.02	4.65	
累積寄与率(%)	25.96	32.69	37.72	42.37	
因子間相関					
I - II	-.59	-	-	-	
I - III	.36	.16	-	-	
I - IV	.24	.22	-.11	-	

(4) (1) (2) (3)の結果に基づき、属性を統制した上で、すなわち本研究では、患者と配偶介護者のみを対象としてグループ介入を行うこととした。介入の手法には、言葉によらないアプローチとして、回想法およびコラージュ療法を用いた。これまでに、コラージュ継続制作を用いた実証的な効果研究はみあたらない。そこで今回、軽度認知症患者とその配偶介護者7組を対象に回想法コラージュプログラムを実施し、効果検討にむけた基礎的知見を見出すことを目的とした。またその際、患者と介護者との関係性へアプローチするために、夫婦関係に関連したテーマを設定するこ

ととした。

毎回のプログラムは、隔週1回1時間半、全7回(約4ヶ月間)連続して行った。②～⑥の全5回でグループによる回想コラージュ療法を行った。効果評価には、バウム・テスト、気分、開放性、QOL、介護エフィカシー、介護レジリエンスを測定する尺度を用いた。

その結果、バウム・テストにおける成熟度の上昇とエネルギー感の低下が示された。また人格特性における開放性、およびDementia Happy Check にみるQOLの向上がみとめられた。一時的な気分の変化としては、生き生きとした気分の向上がみられた。さらに介護者では、介護エフィカシーおよびレジリエンスの向上が示された。

成熟度は、現実への吟味能力や人格の繊細さを示す指標である。回想コラージュ療法では、想起された出来事に対する共感的相互作用を通じた自己洞察が目的となる。介入により自己の明確化や創作意欲の向上とともに、情動的・行動的側面が改善され、コラージュを媒介とした称賛等の良好な人間関係が築かれた結果、コミュニケーション能力が向上したと考えられる。一方、エネルギー感の低下は知的機能低下に伴う防衛の現れであり、自我の不安定さが露呈した可能性もある。

今後も対象者の数を増やし、回想コラージュ療法の効果を認知症患者への心理療法として確立していく必要がある。また成熟度や開放性といった、これまでの指標ではみえない人格上の効果指標についても更なる検討が必要である。

(5) 以上、本研究では、認知症患者と介護家族を対象とした心理教育プログラムにおける、介入内容、介入方法、介入指標の主に3点から検討を行ってきた。

今後の展望として、介入指標の洗練化をさらに進めていく必要がある。とくに認知症患者の介入効果指標として、バウム評価指標にみる成熟度は、認知機能指標ではみえない人格上の効果指標となり得ることは、大きな収穫である。また介護者にとっても、患者との関係性にアプローチすることで、「介護に関わる新たな力」の獲得につながる可能性が示唆されたことは有意義であると考えられる。しかしながら、本研究の知見は心理教育的介入プログラムの開発における方向性を示したにすぎず、今後も継続的なデータ収集とともに、本介入プログラム内容の効果検証をひきつづき行っていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計3件)

- ① 森本美奈子・厚村史美 成人用レジリエンス尺度の作成と属性による差異. 日本心理学会第72回大会. 2008.9. (北海道)
- ② 森本美奈子・柴田由起・中原純・前田潔 認知症患者に対する回想カラージュ療法の試み(1)—バウム画印象評定に着目して—. 日本心理学会第73回大会. 2009.8. (京都)
- ③ 中原純・森本美奈子・柴田由起・前田潔 認知症患者に対する回想カラージュ療法の試み(2)—気分・開放性・QOLの変化に着目して—. 日本心理学会第73回大会. 2009.8. (京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森本 美奈子 (MORIMOTO MINAKO)
梅花女子大学・現代人間学部・講師
研究者番号：70388601

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：